

へんがく しょうじやのじん
扁額「小蛇仁」

—土浦病院に贈られた小川芋銭の書

土浦病院は大正3(1914)年、内西町(現在の中央一丁目)に石島医院として石島ゑい(1885～1977)が開業した病院です。産婦人科を専門とし、石島家は三代に渡り地域医療を支えました(平成30年閉院)。

土浦病院には、小川芋銭(1868～1938)の作品が受け継がれてきました。芋銭は、牛久を拠点に活躍した画家で、特に河童を主題に描いた作品でよく知られています。

土浦病院の作品は、ゑいの夫で、茨城県衛生技師・保健所所長などを務めた績(1884～1960)と芋銭との交友の中で制作されたもので、大正時代中期から昭和12(1937)年ごろの作品が残されています。写真の扁額「小蛇仁」もその一つで、石嶋国手のためにと、添書が草書でしたためられています。国手とは、医師を敬つていう語で、ここでは績を指しているようです。

さて、この書の真ん中の文字ですが、「蛇」とすんなり読めるでしょうか。実はこの文字は最近まで解読できず、この書の意味するところも明

らかではありませんでした。このたび小川芋銭研究者である北畠健さんの協力を得て、この文字は「蛇」と解読することができました。中国の孫思邈(？～682)という、医学書「千金方」「千金要方」(とも)を著した人物に関わる逸話が元になっていることが分かったのです。

解読のヒントは牛久の小川家に残された、芋銭の草稿類の中にありました。過去の調査で、孫思邈について芋銭が記していたことに思い当たり、あらためて確認したところ、「或る時小蛇の傷めらるを救いたる事より：」(一部判読困難)というくだりを再発見できたということでした。

孫思邈には、小さな蛇が痛めつけられているのを見て、代金を払ってその蛇を得て、仁術(医療のこと)を施して逃したという逸話があります。この逸話が、医師の資格を持ち、保健衛生に携わる績に、あるいは石島夫妻に、さらには土浦病院にふさわしいと考えて書いてくれた可能性があります。

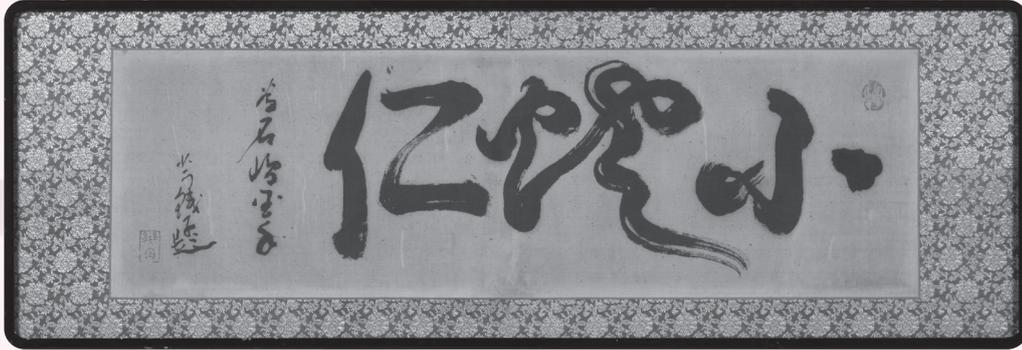
芋銭は中国の古典をよく調べ、古

典を元にした作品も多く制作しました。孫思邈は、老子・莊子の思想を論じ、医薬にも精通したといえます。

医学書「千金方」は30巻に及ぶもので、「人命は貴く千金の価値がある」と書いてあります。芋銭は孫思邈を題材とした絵画を制作しており、この「小蛇仁」の書も、そうした芋銭の幅広い教養を示す作品の一つといえそうです。

博物館では10月11日(日)までテーマ展「土浦病院と小川芋銭」を開催しています。また、今回紹介した扁額と、筑波山を描いた風炉先屏風を、11月29日(日)まで展示しています。ぜひ足をお運びください。

関市立博物館 ☎824・2928



扁額「小蛇仁」(昭和時代初期 当館所蔵)